

学校だより

京都市立洛西中学校
平成20年5月14日
(第5号)

5月1日(木)創立記念日、5校時に

全校道徳 兼 家庭教育学級 を行いました。

京都文教大学 竹口等准教授より「差別：不思議発見」と題して、憲法月間に因んで、人権についての講演をしていただきました。

示唆に富んだお話でした。その一部を紹介します。もう一度、読み返してみて、当日、感じたことを思い出してみてください。また、保護者の方々にも読んでいただき、家族一緒に「人権の大切さ」について話し合ってみる機会にしていいただければ、大変ありがたいと思います。

2つの国の「イス取りゲーム」

2つの国の「イス取りゲーム」の話をします。「日本のイス取りゲーム」は、イスを一つずつ減らして行って、残ったイスの取りっこですね。だんだんイスが減っていき、人も追い落とされていく。自分が生きるために他人を追い落とすゲームです。負けたら仕舞いです。これをゲームで学びます。

一方、同じイス取りゲームでも、「オーストラリアの一部で行われているイス取りゲーム」もあります。それは日本と同じようにイスは減っていきますけれども人間は減らない。1つイスが減りますと、余った人を誰か呼んで2人が一緒に座る。イスがどんどん減りますね。すると残っているわずかなイスに、座る人たちがどんどん増える。最後に残った1つのイスに、全員が座るゲームです。助け合うゲーム。男も女も一緒になり、大きな身体の子どもは小さい子どもを肩車して、抱きついたり支えたりして、1つのイスにとにかく乗る（座る）ゲームです。ボタンと何回も倒れるけれども「もう1回やって。もう1回やって。」といいます。全員生き残れたら、歓声が上がります。1人勝ちじゃない。全員が助け合って勝ち抜くゲームです。

1981年、ジェシー・ジャクソン牧師の

「なぜ黒人はアフーマティブ・アクションを必要とするのか」より（裏面）

スポーツ選手の例を使って説明したら理解してもらえるだろうか。二人の長距離ランナーが勝敗をかけスタートをきった。2分後、審査員達は、後れを取っているランナーが足首に重い鉄玉をつけて走っていることに気がついた。審査員はレースを中断させて両ランナーを止まった地点に止めたまま、遅れをとっているランナーの鉄玉を取り除いた。そして再び空銃を撃って、二人が止まったその地点からスタートさせた。予想通り最初から鉄玉をつけないで走ったランナーがかなりの差をつけてゴールインした。

さて、このレースをフェアだと思える者がいるだろうか。もちろん、誰もが「ノー」と答えるに違いない。レースをストップした時点で、鉄玉をつけていたランナーの遅れを取り戻すためのなんらかの処置が施されたとしたら、それを鉄玉を全くつけずに走ったランナーに「不公平だ」という者がいるだろうか。「ノー」である。人種問題が入ってこない故に、このランナーのケースだったら、誰にも納得がいくようだが、ことが人種問題になると、とたんに意見が分かれてしまう。

しかしアメリカにおいて、黒人はこの鉄玉をつけて走ってきたランナーと同じ立場にあることを理解してほしい。われわれは鉄玉を足首にはめられて走ることを強要されてきた。奴隷制という鉄玉。就職、教育、住宅における過去及び現在の差別という鉄玉。過去のことは認めるが、少なくとも現在は、教育・公共施設の利用・就職・住宅・政治の場での差別を禁止する法律があるではないか、という人もいるだろう。しかしそれらの平等を保障する法律は、長年はめられてきた鉄玉を取り除く役割を果たしたに過ぎない。鉄玉を取り除くだけではギャップは縮まらない。しばしば人々は結果だけを見て、その歴史的背景を理解しようとしない。長距離ランナーのケースで言えば、もしこのレースの最後の方だけを観戦しただけなら、遅れを取っているランナーにギャップを埋める措置をしたら、それは先を走っているランナーに対する差別だと取られてしまう。しかしレースを最初から見ていたならば、遅れを取っているランナーへの措置は、公平で当然なことであることが分かるだろう。アファーマティブ・アクションは、この過去における差別、不利な立場を埋め合わせるためのシステムである。

雇用平等委員会の最近の刊行物によれば、差別解消の進歩が現在のペースで進行するとすれば、就職差別を全面的になくすためにはあと43年かかるという。経済的・教育上の平等を現実化するには、アファーマティブ・アクションが必要なのである。長年の差別の故に、われわれは遅れを取っている。680人の白人人口に対して1人の白人弁護士がいるが、黒人弁護士は4000人の黒人に1人の割合でしかない。649人の白人人口に対して1人の白人医師がいる一方で、黒人医師は5000人の黒人に対して1人の割合である。1900人の白人人口に対して1人の白人歯科医がいるが、黒人の歯科医は8900人の黒人に対して1人しかいない。このギャップを埋めるために、われわれはアファーマティブ・アクションを必要とする。

